トロイアの存亡にかかわる教え
Ovidius *Ars Amatoria* 3, 439-440[1]

日向太郎

(1)「プリアムス説」

Ovidius *Ars Amatoria* (以下 *Ars*) 3, 433-466 は、付き合いを避けるべき男性について詩人が女性読者に指南する一節である。そのなかの 439-440 では、自説を信ずるよう読者を促す目的で、トロイアの存亡にかかわる教え praecepta を引き合いに出している。

> vix mihi credetis, sed credite: Troia maneret,
> praeceptis, Priame, si foret usa tuis.
> 私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスよ、もしあなたの言うところに従ったのであれば。

これは、主要写本 (R, Y, A) の読みである[2]。Priame は tribrach を形成するので、韻律に合わない。そこで多くの校訂者[3] は、440 にかんして以下の読みを採用する。

> praeceptis *Priami* si foret usa *sui*.
> もし[トロイアが]自身のプリアムスの言うところに従ったのであれば。

Priami ... sui は写本Y及びAに書き加えられた修正語句である。若干の recentiores も上記の読みを示している。しかし、praecepta をプリアムスに帰するこの読み (以降「プリアムス説」と称する) には2つ問題点があるように思われる。

第1に、sui (自身の) と言うとき、この所有形容詞にどれほどの意味があるだろうか[4]。エレゲイア詩にあって、pentameter の後半にこそ、通常 couplet の核心となるような語句が置かれることを思えば、sui のような埋め草的な語が用いられているのは奇妙と言わざるを得ない。recentiores のなかには sui の代わりに senis と読むものがあるが、それはこのような違和感に起因している修正だと考えられる。もっとも、Priami .... senis (「老プリアムスの」) と読んだところで、それは埋め

---

(1) 本考察は第4回「フィロロギカ」研究集会 (2005 年 10 月 15-16 日於慶應大学) で行った報告に加筆修正を施したものである。報告にご参加いただいた方々、とりわけ司会を務めていただいた大芝芳弘氏をはじめ、納富信留氏、大塚英樹氏、本城大一氏、さらに本考察の査読をお引き受けいただいた先生方からも貴重なご意見を賜った。この場を借りて謝意を表したい。

(2) Sigla は Gibson の版に従う。

(3) Housman ad 8, 251; Kenny (1961), Id (1995); Lenz; Gibson. なお、Brandt もこの読みを採用しているが、その註においては疑義を述べている。

(4) Goold 85.

草であるという感を払拭できるものではない。

第2に「プリアムス説」を採用する場合、トロイア人が王の命令に背いたばかりに国家の滅亡を招く羽目になった、といった趣旨の伝承が存在したことが前提となる。通常そのような命令はヘレネー返還と考えられており、伝承の存在を裏付けるものとして、Palmer は Ovidius *Heroides* 5, 95-96 を挙げる(5)。

> quid gravis Antenor, Priamus quid suadeat ipse,
> consule, quis aetas longa magistra fuit. (*Heroides* 5, 95-96)
> 厳めしいアンテーノールが、他ならぬプリアムスがどう説得するか相談を持ちかけなさい。この二人の教師となったのは、長い人生なのですから。

上記はオエノーネーのパリス宛の書簡であり、ヘレネーをギリシア人に引き渡すことを促している。書き手はヘレネー返還を、およそ人生経験を重ね分別が備わった人間のなすべき行為として捉えているが、プリアムスがパリスに返還を命じた、とは言っていない。実際、この行の直前には、

> quae si sit Danais reddenda, vel Hectora fratrem,
> vel cum Deiphobo Polydamanta roga. (*Heroides* 5, 93-94)
> 彼女 [ヘレネー] をギリシア人に返すべきか、兄弟ヘクトールにあるいはデーイポブスとともにポーリュダマースに尋ねてみるがよいでしょう。

との一節もある。したがって、返還命令はあくまでも仮定の話である。一連の固有名詞は、ヘレネーを手許に引き留めておくのが狂気の沙汰であることを強弁するために挙げられている、と考えるべきだろう。*Heroides* 5, 95-96 は伝承の存在を裏付けるものとは言えない。

Palmer 同様、「プリアムス説」を支持する Gibson は、*Ilias* 7 でアンテーノールがパリスに、ヘレネー及び奪った財宝をメネラーオスに返還するよう提案したことを挙げる(6)。アンテーノールの発言にパリスは反発し、財宝の返却に承諾しても、ヘレネーを引き渡すことを断固として拒絶する。このやりとりを受けて、プリアモスはパリスの言葉をギリシア軍に伝えるように命ずる。そしてプリアモスの命令は、実行されるのである。「ある伝承によれば、*Ilias* 7 にすでに仄めかされているように、プリアモスはアンテーノールのヘレネー返還の提案に同意していた」と Gibson は述べている。

しかし、*Ilias* 7 でプリアモス王はパリスの意向を一切批判せず、むしろこれを敵方への公式提案としている。アンテーノールに同意していたら、王は息子の頑なな態度をたしなめたり、ヘレネー返還を勧告してもよさそうなものだろう(7)。さらに

(5) Palmer ad 5,95.

(6) Gibson ad 3, 440 "A reference to Priam here would be appropriate: according to one tradition, implicit already in the *Iliad* (7. 348ff., 368ff., 386ff., 390, 393), Priam concurred with Antenor's proposal to give Helen back to the Greeks."

(7) Brandt (ad 3,440) は、*Ilias* 3, 164-165 を挙げ、戦争の原因はヘレネーではなく、神々

この提案は、同朋市民の反対に遭うことも無く、敵方に伝えられるのであってみれば、*Ars* 3, 439-440 の反実仮想の条件文で示唆されている現実とは噛み合わない。「プリアムス説」に即した伝説が「*Ilias* 7 に仄めかされている」とは到底考えられない。

また、Gibson は Ovidius *Metamorphoses* 13, 200-204[8] をも「プリアムス説」を裏付ける一節としている。この一節によれば、プリアムスはオデュッセウスの説得に心を動かされ、ヘレネーを返還する気持ちになった。だが、パリス及び彼の許で彼女を誘拐した兄弟たちは返還案に反発し、ギリシア軍の使者オデュッセウス及びメネラーウスを亡き者にしようと心を逸らせた。

『変身物語』第 13 巻のエピソードには、プリアムスがヘレネーの返還を命じたとも、何か指示を与えたとも言われていない。また、パリスとその取り巻きは返還案に聴く耳を持たなかったが、トロイア全体が提案に抵抗を示したわけでもない[9]。むしろ大多数の市民がパリスを白眼視し、返還を当然の策と見て、これを支持したと考えられるから[10]、仮にプリアムスがヘレネー返還を命じたとしても、直前の vix mihi credetis, sed credite (439) にはそぐわない。

以上から、市民がプリアムス王の教えを信じ難いものとして背いたという伝承の存在は確認できない、したがって「プリアムス説」については、その前提すらも怪しいと言わざるを得ない。

(2)「詩人説」

「プリアムス説」の裏付けに無理があることを指摘している論者のなかで、Woytek は独自の考察に基づいて、以下のような修正案を提示している[11]。

> vix mihi credetis, sed credite: Troia maneret,
> praeceptis *Priami* si foret usa *nurus.*
>
> 私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスの嫁 [ヘレネー] が教えに従ったのであれば。

にあるという認識に立つプリアムスが、ヘレネー返還を提案したと考えるのは無理だとしている。

(8) accusoque Parin praedamque Helenamque reposco / et moveo Priamum Priamoque Antenora iunctum; / at Paris et fratres et qui rapuere sub illo/ vix tenuere manus (scis hoc, Menelae) nefandas, / primaque lux nostri tecum fuit illa pericli. (私 [オデュッセウス] はパリスを糾弾し、分捕り品とヘレネーの返還を求め、プリアムスとアンテーノールの心を動かす。しかしパリスと兄弟たちと彼の許で掠奪を働いた者たちは (メネラーウスよ、君はこのことを知っている) 不埒な手をやっとのことで抑えた。あの日が私と君が出合った危険の最初の日だった。)

(9) 「プリアムス説」に対する Hertzberg の異議として、Brandt (242) は以下のような論点を引用している。"... waren wahrlich nicht die Troer, sondern einzig und allein Paris gegen die Auslieferung."

(10) このことは、例えば *Ilias* 6, 350-351 のヘレネーの言葉 (ἀνδρὸς ἔπειτ' ὤφελλον ἀμείνονος εἶναι ἄκοιτις, / ὅς ἤδη νέμεσίν τε καὶ αἴσχεα πόλλ' ἀνθρώπων. [人々の怒りや人々に対する恥を知っているもっとまともな夫の妻であったらよかったのに]) によって示唆されている。

(11) Woytek 181-189.

Woytekによれば、「教え」とは詩人オウィディウス自身の教えである。オウィディウスは、*Ars* 3の序でメーデイア、アリアドネー、ピュッリス、ディードーに呼びかけ、彼女たちが破滅したのは「愛することを知らなかった。技術が欠けていた」からだと言っている(33-42)。一方、ヘレネーは*Ars* 3において、詩人の教えを乞う必要のない(つまり、何もしなくても男が言い寄ってくる)絶世の美女として別格の扱いを受けている(12)。オウィディウスが恋愛の師たることを自任し、恋故の災いに身を滅ぼしたヒロインを列挙するくだりは、*Remedia Amoris*においても認められる。そのなかには以下のような興味深いcoupletもある。

redde Parin nobis, Helenen Menelaus habebit
　　nec manibus Danais Pergama victa cadent.　　(*Remedia* 65-66)
パリスを私に任せるがよい。ヘレネーをメネラーウスは自分のものとすることであり、ペルガマが敗れ、ギリシア人の手に落ちることもないだろう。

トロイアの存亡にかんして語っているという点で、この詩行は*Ars* 3, 439-440と接点がある。*Remedia* 65-66において、Woytekが重視するのは、ヘレネーがパリスの誘惑に乗ったことがトロイアの滅亡につながったという神話認識である。そして、*Ars* 3, 439-440に先立つ部分433-438では、女性が避けるべき男の特徴について、詩人は語っている。

Sed vitate viros cultum formamque professos
　　quique suas ponunt in statione comas.
quae vobis dicunt, dixerunt mille puellis:
　　errat et in nulla sede moratur amor.
femina quid faciat, cum sit vir levior ipsa
　　forsitan et plures possit habere viros?　　(*Ars* 3, 433-438)
だが洗練と見目麗しさを身上とするような男たちや髪を整然とさせている連中は避けるがよい。彼らがあなた方に言うことは、千の乙女たちに言っていることである。そして、彼らの愛はふらふらとし、一箇所には留まらない。女はどうしたらよいものか、男が女よりも柔肌で、より多くの男を恋人にしかねないのだとすれば。

伊達男の描写は、*Ilias* 3で言われているパリスの人物像(εἶδος ἄριστε, γυναιμανές, ἠπεροπευτά [39])に共通する。Woytekは、この他パリスのヘレネー宛の書簡である*Heroides* 16と*Ars* 3, 433-438との間にも語句上の類似を指摘し、伊達男の描写はパリスを連想させると言う(13)。そして439-440では、ヘレネーが伊達男を避けよという自分の教えに従っていたならば、トロイアは残ったであろうと詩人は歌お

(12) *Ars* 3, 251-254 non mihi venistis (...) / aut Helene, quam non stulte, Menelae, reposcis, / tu quoque non stulte, Troice raptor, habes;

(13) Woytek 185-186.

うとしている、と彼は考える(14)。

Woytekの提案の難点は、まずテクストの意味が曖昧になることだろう。praeceptaは、誰のpraeceptaなのか不明確である。単語の並びからすると、「もし嫁がプリアムスの教えに従ったならば」と解することも可能であり、むしろその方が自然だろう。

この点を不問に付すとしても、なぜヘレネーが詩人の教えに従うべきであったことが言われなければならないのか、疑問である。先にも指摘したように、詩人は同じ*Ars* 3において、セメレーとともに彼女を自分の教えを乞う必要のない人物として挙げている。ここでヘレネーは自分の言うことに耳を傾けるべきだとすれば、前言に矛盾することになってしまう。

さらに、オウィディウスは本当に433-438でパリスへの言及を読みとるよう読者に求めていると考えるべきか否か、改めて問い直す必要がある。詩人は伊達男は避けよ、と述べてから441以降でその理由を説明する。第1にそのような男たちのなかには、愛していると見せかけて近づき、女性を身ぐるみ剥ぐような卑劣な輩がいるからである(441-452)。第2に女性に対して不誠実で、ドン・ジョヴァンニのように振る舞う者が少なくないからである(453-460)。Woytekの解釈に従えば、ヘレネーは441以降で言われているような、被害を受けた女性と同類ということになってしまう。確かに、433-438で言われている男とパリスとの間には外見上の共通点はあるが、ヘレネーは詩人の教えを必要とする女性とは似ても似つかない。

加えて、パリスもスパルタの財宝を掠奪しても、恋人の所持品を奪って、彼女から泥棒呼ばわりされることはなかった。何よりもパリスのヘレネーへの愛は、見せかけの愛ではないだろう。457-460ではテーセウスやデーモポオーンが不実な男の代表例として挙げられているが、パリスは彼らとは本質的に異なる。ヘレネーを裏切ることはなく、彼女を妻とし、返還命令にも頑として応じなかった。少なくとも、彼は彼女の前では誠実な恋人である。

そのような意味で、パリスには441以降で言われているような泥棒とも漁色家ともほとんど類似点がない。類似点は、お洒落に余念がないという外観に留まる。

以上から、Woytekの唱える「詩人説」は受け入れ難い。

(3)「カッサンドラ説」対「アイサコス説」

Vix mihi credetis, sed credite (439)を考慮したとき、praecepta (440)とは、同朋市民が決して信ずることがなかった(15)カッサンドラの予言である、とみなすのが最も自然である。このような解釈(「カッサンドラ説」)に立脚して、Madvigは、主要写本RやYの読みPriameをPriamei (Priamēisの呼格)に修正しただけで次のようなテクストを提示する(16)。

(14) Woytek 187-189.

(15) Cf. Apollodorus *Bibliotheke* 3, 12, 5 "ἣ [i.e. Κασσάνδρᾳ] συνελθεῖν βουλόμενος Ἀπόλλων τὴν μαντικὴν ὑπέσχετο διδάξειν. ἡ δὲ μαθοῦσα οὐ συνῆλθεν· ὅθεν Ἀπόλλων ἀφείλετο τῆς μαντικῆς αὐτῆς τὸ πείθειν."; Servius ad Verg. *Aen.* 2, 247.

(16) Madvig 114.

vix mihi credetis, sed credite! Troia maneret,
praeceptis, *Priamei*, si foret usa tuis.
私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスの娘よ、あなたの教えに従ったのであれば。

Madvig は Vergilius *Aeneis* 2, 246-247 (tunc etiam fatis aperit Cassandra futuris / ora dei iussu non umquam credita Teucris.) を挙げ、「あなたの教え」とはトロイア人が木馬をトロイア城内に引き入れる際の破滅の予言であると見なす。

近年では、Cristante や Ramírez de Verger といった校訂者が Madvig の提案を支持し、本文に採用している(17)。この読みは、明解で意味も良く通る。そして字面も写本に極めて近い。加えて、Priamēis という patronymicon は、*Amores* 1, 9, 37 及び *Ars* 2, 405 にも使用例がある(18)。

カッサンドラのように狂気の状態にある者の発言は、praecepta と呼ばれるに相応しくなく、理知的存在にこそ praecepta は似つかわしいのではないかと反論する研究者は少なくない(19)。しかし、Vergilius *Aeneis* 2, 345-346 ではカッサンドラを熱愛し、トロイアから離れようとしなかったため、命を落とすことになるコロエブスが「狂気を帯びた許婚の教えに耳を傾けなかった不幸な者 infelix qui non sponsae praecepta furentis / audierit」と呼ばれていることからもわかるように、狂気と praecepta は両立し得るのである。

Madvig 提案の唯一の、しかし深刻な問題は、韻律上 Priamei の語末 -ēi を synizesis と見なさざるを得ないが(20)、それが pentameter の前半を締めくくる異例の位置に現れることである。類例は、恋愛詩人の先達プロペルティウスには認められる。

Andromede monstris fuerat devota marinis:
haec eadem Persei nobilis uxor erat. (2, 28, 21-22)
アンドロメダは海の怪物に捧げられていた。同じ彼女がペルセウスの名だたる妻であった。

まさに pentameter を二分する位置に、synizesis (Persei) がある。しかし、だからといって同様の自由度をオウィデイウスに認める訳には行かないだろう。彼の恋愛詩作品群の synizesis の例としては、*Amores* 1, 7, 15 (Thesei); 1, 8, 59 (aurea); 2, 13, 9 (alveo); 3, 9, 21 (Orpheo); 3, 12, 39 (Atrei); *Heroides* 6, 49 (aureo); *Ars* 3, 457 (Theseo) があるが、いずれも奇数行の末尾に現れている(21)。こうした傾向は、

(17) Pianezzola, Baldo e Cristante (1991); Ramírez de Verger (2003). Cf. Pianezzola, Baldo e Cristante (1989) 169; Ramírez de Verger (1993) 323.

(18) Pianezzola, Baldo e Cristante (1989) 168.

(19) Housman ad 8, 251; Palmer ad 5, 95; Kenny (1993) 466; Woytek 184.

(20) 類例としては、Horatius *Carmina* 2, 7, 5 "Pompei, meorum prime sodalium."

(21) Woytek 184 n. 71.

すでにウェルギリウスの hexameter にも窺うことができるのである[22]。オウィディウスがウェルギリウスを作詩上の規範として仰いだのだとすれば、異例の synizesis を想定することには慎重にならざるを得ないだろう。

そこで、「カッサンドラ説」を貫き、なおかつ韻律及び語法上無理のない可能性を追求すれば、以下のような Goold の案に行き当たる[23]。

> vix mihi credetis, sed credite: Troia maneret,
> praeceptis *Priamo* si foret usa *satae*.
> 私の言うことはなかなか信じられないだろうが、信じて欲しい。トロイアは残ったことだろう、プリアムスの娘の教えに従ったのであれば。

Priamo ... satae は「プリアムスの娘」すなわちカッサンドラを迂言的に表す語句である。オウィディウスは aliquo natus もしくは aliquo satus など、親の名によって人物を特定する表現を好んでいたと思われるので、まず語句の選択という点で無理がない。pentameter 後半部の usa satae という κακέμφατον も決して珍しいものではなく、特に問題視するには当たらない[24]。

それでは、いかなる過程を経て上記 praeceptis Priamo si foret usa satae が、主要写本の読み、praeceptis, Priam*e*, si foret usa *tuis* に変遷したのか。Goold は以下のように説明する[25]。

① usa satae が haplography (重字脱落) によって usa tae もしくは usa te となる
② 韻律上、最後は iambus を形成する語が欲しいので、usa te は usa tuis となる
③ usa tuis に合わせて、呼格形が必要なので Priamo は Priame となる

一方、Kenney[26] は、この説明の②を受け入れ難いものとする。その上で、「カッサンドラ」説の棄却を提唱する。彼は、439-440 で言及されている praecepta は、プリアムスとアリスベーの息子であるアイサコスの教えであるとする (「アイサコス説」)。実際、アイサコスはヘカベーがパリスを懐妊中に見た夢を占い、生まれてくる子がトロイアを滅ぼすことを予言した、との伝承も存在する[27]。この伝承を踏

(22) Norden 217 (ad 6, 280 ferreique). McKeown 233-234.

(23) 筆者の知る限り、*Ars* の主要な刊本のうち、この読みを採用しているのは Loeb 版 (J. H. Mozley-G. P. Goold) のみである。

(24) Goold 86-87.

(25) Goold 86.

(26) Kenny (1993) 465-466.

(27) Cf. Lycophron 224-228 "μήδ' Αἰσακείων οὐμὸς ὤφελεν πατὴρ / χρησμῶν ἀπῶσαι νυκτίφοιτα δείματα, / μιᾷ δὲ κρύψαι τοὺς διπλοῦς ὑπὲρ πάτρας / μοίρᾳ, τεφρώσας γυῖα Λημναίῳ πυρί· / οὐκ ἂν τοσῶνδε κῦμ' ἐπέκλυσεν κακῶν."; Apollodorus *Bibliotheke* 3, 12, 5 "δευτέρου δὲ γεννᾶσθαι μέλλοντος βρέφους ἔδοξεν Ἑκάβῃ καθ' ὕπνους δαλὸν τεκεῖν διάπυρον, τοῦτον δὲ πᾶσαν ἐπινέμεσθαι τὴν πόλιν καὶ καίειν. μαθὼν δὲ Πρίαμος παρ' Ἑκάβης τὸν ὄνειρον, Αἴσακον τὸν υἱὸν μετεπέμψατο· ἦν γὰρ ὀνειροκρίτης παρὰ τοῦ μητροπάτορος Μέροπος διδαχθείς. οὗτος εἰπὼν τῆς πατρίδος γενέσθαι τὸν παῖδα ἀπώλειαν, ἐκθεῖναι τὸ βρέφος ἐκέλευε. Πρίαμος δέ, ὡς ἐγεννήθη τὸ βρέφος, δίδωσιν

まえて、Kenney は 440 を praeceptis *Priamo* si foret usa *sati.* と読む。Priamo ... sati とはアイサコスを迂言的に表す語句である。

しかし、Kenney の対案は、Goold 案に比べ、主要写本の読みとの隔たりがより小さいというわけではない。また、真実なのに信じ難いことで定評のある予言は、やはり何と言ってもカッサンドラの予言である。カッサンドラがトロイアの滅亡にかかわるような警告を発したのに、それが無視されたのは一度ではない。エウリーピデースによれば、彼女はパリスが生まれた時に「プリアムスの国の大いなる汚名」であるとして彼を殺すことをあらゆる人に説き、長老たちに乞うた(28)。彼がヘレネーを連れて帰ったときにも(29)、そして木馬がトロイア城内に入るときにも、彼女は破滅を予言した(30)。しかし、これを真に受ける者はいなかった。

カッサンドラの予言が自らの言葉にも通ずることを、プロペルティウスも 3, 13 の結びで以下のように歌っている。

> Certa loquor, sed nulla fides; neque enim Ilia quondam
> verax Pergameis Maenas habenda malis:
> sola Parim Phrygiae fatum componere, sola
> fallacem patriae serpere dixit equum.
> ille furor patriae fuit utilis, ille parenti:
> experta est veros irrita lingua deos. (Propertius 3, 13, 61-66)
>
> 私は確かなことを語る。しかし信頼は無い。実際、かつてイーリオンのマエナス［カッサンドラ］もペルガマの災いに対して本当のことを言っているとは見なされなかった。ただ一人彼女だけがパリスがプリュギアの破滅を仕組んでいると、祖国にとって欺瞞に満ちた馬が忍び込むと言ったのである。あの狂気こそが、祖国には、父親には有益だったのだ。舌は神々が嘘をついていないことを悟っていたのに、それは何の甲斐もなかった。

真実を語りながら、人々になかなか信じてもらえないことを嘆くという点で、内容的には *Ars* 3, 439-440 によく似ている。

Ovidius *Ars* 3, 433-466 と Propertius 3, 13 との接点はこれだけに留まらない。3, 13 の incipit は、「君たちは尋ねる、どうして欲張りな乙女が夜の値段をつり上げ、財産は情事によって消尽され、損失を嘆くことになっているのか Quaeritis, unde avidis nox sit pretiosa puellis / et Venere exhaustae damna querantur opes.」であり、以降はプロペルティウスが読者の問いに対する教えを授けるという形になっている。つまり、彼はオウィディウス同様、恋愛の師として 3, 13 を展開して

ἐκθεῖναι οἰκέτῃ κομίσαντι εἰς Ἴδην· ὁ δὲ οἰκέτης Ἀγέλαος ὠνομάζετο."

(28) Euripides *Andromache* 297-300. おそらくは、Ennius *Alexander* の一節 (*Sc.* 41-42 J. = 63-64 V.[2] adest adest fax obvoluta sanguine atque incendio. / multos annos latuit. cives ferte opem restinguite.) もカッサンドラがパリスを殺すことを市民たちにけしかけている場面であろうと思われる。

(29) Colluthus 391-394.

(30) Vergilius *Aeneis* 2, 247; Tryphiodorus 373-438.

いることになる。

この歌を通じてプロペルティウスが指摘しているのは、奢侈の横行であり、社会が黄金に支配されているという由々しき事態である。拝金主義の害毒は良家の婦人や乙女までをも堕落させ、ローマには最早誠実な愛はなくなってしまった。古き良き時代の質素な生活やおおらかな男女の性愛は、黄金の支配のせいで見る影もなくなった。そして、やがてローマは滅びるだろうと予言しているのである。

このようなプロペルティウス流の明白な贅沢批判や、拝金主義に対する嘆きについては、オウィディウスは別の巻 (*Ars* 2, 273-286) で展開している(31)。一方、*Ars* 3, 433-466 においては、批判や嘆きは表立った形で現れている訳ではない。しかし詩人は、拝金主義に毒された女性が財力を装う男性に騙され、身ぐるみ剥がれるという事態を仄めかしているように思われる。443-446 に示された人物像は、通常女々しい男性の特徴を表すと考えられている(32)。しかし、それは同時に女たちから金持ちだと思われるような外観でもある。「純粋なナルドゥスの香油 liquido nardo (443)」がとても高価であったことは、よく知られている(33)。また、「生地の目が細かいことこの上ないトガ toga ... filo tenuissima (445)」は上質であり、プロペルティウスの恋人、キュンティアがまとっていることで知られているコース産の絹製高級衣服 (Propertius 1, 2, 2) を連想させる(34)。複数の指輪をはめること (446) は、成金にありがちな悪趣味でもあろう。たとえば、ペトローニウス『サテュリコン』では、トリマルキオーが音楽演奏を伴って華々しく宴席に現れるとき、左手の小指には金メッキをした大きな指輪を、その隣の指には一回り小さいが、星形の鉄製パーツをはり付けた黄金の指輪をはめていたことになっている(35)。したがって、女性はこうした外観に幻惑され、相手を金持ちだと思い込みかねない。

つまり、プロペルティウスが持たざる男性の立場に同調しているのに対し、オウィディウスは女性の利害に即して、富が絶対的な価値を持つようになってしまった社会の孕んでいる危機を指摘する。しかし、目指す方向は同じである。両者ともに、男女間の愛のあるべき姿を説き、ローマをこの危機から救おうとしているのである。だからこそ、オウィディウスはプロペルティウスに倣って、いわば警世の予言者に

(31) *Ars* 2, 277-278 (aurea sunt vere nunc saecula: plurimus auro / venit honos, auro conciliatur amor.) に認められる aurea, auro の polyptoton は、Propertius 3, 13, 49-50 (auro pulsa fides, auro venalia iura, / aurum lex sequitur, mox sine lege pudor.) のそれを意識したものであろう。

(32) Cf. Gibson ad loc.

(33)『マルコ福音書』(第 14 章第 3 ～ 4 節) によれば、ベタニアのある女がイエスに頭に注ぎかけたナルドの香油は、非常に高価なものであり、300 デーナーリウス以上したと言われている。Cf. Plinius 12, 42 "De folio nardi plura dici par est ut principali in unguentis."; Maltby 389 (commentary on Tibullus 2, 2, 7) "nard was the most prized and expensive of unguents among the ancients."

(34) Propertius 1, 2, 1-2 "Quid iuvat ... tenuis Coa veste movere sinus...?" ; Tibullus 2, 3, 53-54 "illa [i.e. Nemesis] gerat vestes tenues, quas femina Coa/ texuit, ..." (下線は筆者による)

(35) Petronius *Satyricon* 32, 3 "habebat etiam in minimo digito sinistrae manus anulum grandem subauratum, extremo vero articulo digiti sequentis minorem, ut mihi videbatur, totum aureum, sed plane ferreis veluti stellis ferruminatum."

耳を傾けることを読者に促している。それ故、*Ars* 3, 439-440 においても、オウィディウスは自らをカッサンドラになぞらえていると考えるのが自然である。

(4) 結語

現在に至るまで多くの校訂者たちが採用してきた読み、praeceptis *Priami* si foret usa *sui* は主要写本の字面 praeceptis, Priame, si foret usa tuis から離れており、神話伝承に即しているとも言い難い。恐らくは主要写本の伝える意味に合わせ、かつ韻律に合わせるために施された恣意的で安直な修正ではないかと思われる。

(1) ～ (3) の考察の積み重ねから、第 1 に praeceptis はカッサンドラに帰される「教え」と解するべきである。そして第 2 に、主要写本の読みとの隔たりは Madvig 案に比べ大きいものの、韻律の点で問題がなく、言葉遣いにかんしても無難な Goold 案を採用するのが妥当だろう。

補遺

Tarrant は、440 にかんする Goold の修正案を受け入れた上で、433-438 が言語、論理の点でオウィディウスの標準から隔たっていることを指摘し、この一節の削除を提案する。彼が挙げる削除の根拠はさほど強固とも思われないが、Kenny (1995) や Ramírez de Verger (2003) は、この提案を参考意見としてそれぞれの apparatus criticus に含めている。したがって、Tarrant の見解にも一言述べておきたい。

Tarrant は、こう述べている。439-466 の導入部分のように見える 433-438 が強調するのは cultus であるが、それは 441-452 では副次的要素に過ぎず、453-466 では何の役割も果たしていない。441-452 と 453-466 のつながりは、男たちのある種の不誠実であり、435-436 でも言われている。しかし、それは 441 mendaci specie ... amoris で初めてその問題に入るかのように形式的に導入されている。このような導入部と後続部分のかすかな齟齬は、*Ars* のように緊密に論じられている作品には稀である、と[36]。

しかし、オウィディウスの論理はこの一節で Tarrant の考えている以上に緊密である。詩人が避けるよう呼びかけているタイプの男は、いわば伊達男であり、その典型的な外見的特徴 (身繕いが度を越しており、髪がきちんと整えられ、甘い言葉で口説き、浮気心があり、体毛処理や肌の手入れに余念がなく、どうかすると同性愛の傾向がある) が 433-438 において簡潔に述べられている。こうした伊達男の身なりや振る舞いは、ひとえに大多数の女性の歓心を買うことを目的としているが[37]、それ自体は女性にとって大した実害とも思われない。

(36) Tarrant 86.

(37) 体毛処理や男色傾向への言及は、直前の couplet (435-436) とはなじまないと Tarrant は考えるが、体毛を剃り、肌を滑らかに保つことは女性の歓心を買うための手管でもある。Cf. Gibson ad 3, 437-438. Martialis 2, 62, 1-4 “Quod pectus, quod crura tibi, quod bracchia vellis, / quod cincta est brevibus mentula tonsa pilis: / hoc praestas, Labiene, tuae — quis nescit? — amicae. / Cui praestas, culum quod, Labiene, pilas?” このマールティアーリスの例が示しているように、女心を買うための手管が行き過ぎると、自らを男色の稚児役とすることにつながる。*Ars* 3, 437-438 もこのような行き過ぎを揶揄していると思われる。

深刻な実害とは、第1に441-442で明確に言われているとおり、このようなタイプに少なくない盗癖である。伊達男の洗練された外観は、卑しい盗癖とはなかなか結びつかない。それは、信じ難い現実である。そこで、439-440ではその信じ難さを見越して、詩人は自らの忠告をかの伝説的なカッサンドラの予言に喩えている。さらに、443-448でより具体的に盗癖のある男の外観を示し、女性読者の警戒感を効果的に煽っているのである。

第2のあり得べき実害としては、453-454でも言われているとおり、欺瞞を挙げている。具体的には、欺瞞とは457-460のテーセウスやデーモポオーンがそうであるように、女性の愛情を悪用して誓いや約束を踏みにじることであろう。しかし、約束が守られている限り、口説き文句や浮気心には欺瞞の疑いはあるにせよ、それ自体罪ではない。そこで詩人は、防衛策として被害に遭った女性を他山の石とするよう勧めたあと(455-456)、相手の出方を窺う方法を指南しているのである(461-462)。

以上のように叙述の展開を捉えた場合、433-438は後続部分との論理的関係で何ら不都合な点はなく、難癖をつけるには当たらない。

むしろ削除によって、男性との出逢いの機会を得るため外出し、公共の場に積極的に現れることを促す先行部分(405-432)とのつながりは悪くなる。

> funere saepe viri vir quaeritur: ire solutis
> crinibus et fletus non tenuisse decet.　(431-432)
> しばしば、男の葬儀で(別の)男が求められる。髪をばらばらにして歩き、涙を抑えないことが似つかわしい。

女性のばらばらの髪は、直後の伊達男の整然とした髪と見事なコントラストを成している[38]。431のvir, viriという同一単語の繰り返しは、433のSed vitate viros ...のvirosと響き合っている。Tarrantの削除案はこの響き合いを損なうだけではない。接続詞が欠け、唐突に話題が転換するのみならず、439-440が直前に位置することになる431-432について言われているのか、それとも直後の441-442について言われているのか曖昧になってしまう。これは、致命的欠陥である。

以上により、Tarrantによる433-438の削除案は適切とは言えない。

○文献一覧

P. Brandt, *P. Ovidi Nasonis de arte amatoria libri tres*, Leipzig 1902.
R. K. Gibson, *Ovid Ars Amatoria book 3*, Cambridge 2003.
G. P. Goold, Amatoria Critica, *HSPh* 69 (1965), 1-107.
A. E. Housman, *M. Annaei Lucani Belli Civilis libri decem*, Oxonii 1926.
E. J. Kenney, *P. Ovidi Nasonis Amores, Medicamina Faciei Femineae, Ars Amatoria, Remedia Amoris*, Oxonii 1961.
Id., Ovidiana, *CQ* 43 (1993), 458-467.
Id., *P. Ovidi Nasonis Amores, Medicamina Faciei Femineae, Ars Amatoria,*

(38) 本城大一氏(cf. 註1)のご指摘による。

Remedia Amoris, Oxonii 1995.

F. W. Lenz, *P. Ovidi Nasonis Ars amatoria*, Torino 1969.

I. N. Madvigii, *Adversaria Critica* vol. 1, Hauniae 1871.

R. Maltby, *Tibullus: Elegies*. Text, Introduction and Commentary, Cambridge 2002.

J. C. McKeown, *Ovid: Amores*. Text, Prolegomena and Commentary vol. II. A Commentary on Book One, Leeds 1989.

J. H. Mozley-G. P. Goold, *Ovid II. The Art of Love, and Other Poems*, with an English translation by J. H. Mozley. Second edition revised by G. P. Goold, Cambridge Massachusetts, London 1979.

E. Norden, *P. Vergilius Maro, Aeneis Buch VI*, 8., unveränd. Aufl., reprograf. Nachdr. d. 4. Aufl. von 1957, Stuttgart 1984.

A. Palmer, *P. Ovidii Nasonis Heroides XIV*, London, Cambridge, Dublin 1874.

E. Pianezzola, G. Baldo e L. Cristante, Per il testo dell'*Ars amatoria* di Ovidio. Proposte e riproposte, *MD* 23 (1989), 151-72.

Id., *Ovidio. L'arte di amare*, Milano 1991.

A. Ramírez de Verger, Observaciones al texto de *Ars Amatoria* de Ovidio, *Emerita* 61(1993), 321-334.

Id. , *P. Ovidius Naso Carmina Amatoria*, Monachii et Lipsiae 2003.

R. J. Tarrant, Ovid, *Ars Amatoria* III. 433-42, *PCPhS* 26 (1980), 85-88.

E. Woytek, Deleantur am. 2, 11, 31 sq. et 1, 14, 17-22, reviviscat Helena (ars am. 3, 440): Textkritische Beiträge zu Ovid, *WS* 111 (1998), 167-189.